

『しんにほんごのきそ』Iの「か文」文末イントネーション —共通語話者の上昇調・非昇調についての聴覚的印象から—

稲垣 滋子
佐藤 由紀子
鈴木 庸子

キーワード：疑問文、文末イントネーション、共通語話者、非昇調、音声的特徴、コミュニケーション機能、ディスコース

〔要旨〕『しんにほんごのきそ』Iの会話文のうち、「か」疑問文の文末イントネーションについて、共通語話者の発音をテープにとり、調査者3名が聴覚的印象から上昇調か非昇調か判定して分析した。その結果、文末が上昇調で発話されない場合があること、その要因として音声的特徴、コミュニケーション機能、ディスコースのタイプの三つが取り出せることがわかった。また、調査者3名の間で、上昇と非昇の判定に不一致がおこること、その要因として「カ」の直前の音が無声化した場合に「カ」が強く聞こえ、これを上昇ととる聞き手がいること、コミュニケーション機能やディスコースの面から非昇調で発話される傾向の高い文は、あいまいな調子になりやすく結果として判定がゆれることが示唆された。

1. はじめに

本稿では、『しんにほんごのきそ』Iの会話文のうち、特に「か」疑問文の文末イントネーションについて、共通語話者の発音を聴覚的印象から分析した結果を記す。

日本語教育では、これまで、疑問文の文末は真偽疑問文も疑問詞疑問文も文末は上昇調で発音するという規則性がほぼ一律に適用されてきた（注1）。しかし、現実には非昇調で発話される場合も多いことから、上昇調と非昇調の現れ方とその要因について分析を進める必要がある。本稿は、そうした展望に立った研究の一端を担うものである。

本研究では、共通語話者（男女学生）20名の会話文録音資料を分析対象とする。調査者3名が録音テープの聞き取りを行い、「か」疑問文の文末イントネーションに関与する要因を追究したところ、音声的特徴、コミュニケーション機能、ディスコースの型の三つがあることが明らかになった。また、文末の上昇・非昇には男女差・個人差もあることがわかった。そこで本稿では、音声、機能、ディスコースの3つの柱を立て、それぞれについて男女差・個人差も合わせて考察することにした。本稿の記述のうち、音声について稲垣、コミュニケーション機能については佐藤、ディスコースの型については鈴木が主として担当した。

今回共通語話者の聴覚的印象を担当した調査者3名は、日本語教育歴が長く、音調についての聞き取りにも自信を持っているはずであったが、録音テープを聞いて聴覚的印象を記述してみると、上昇か非昇かの聞き取りに差があるものが少なからずあることがわかった。そこで本稿ではそのことの実態と原因を究明することも行った。この聞き取りの不一致は、話者の発話における心理的ゆれも関係するのではないかと思われる。

なお、本稿では以下、「か」疑問文を「か文」と呼ぶことにしたい。これは、「か」のつく文がコミュニケーション機能やディスコースの型の上からは必ずしも疑問文とは限らないためである。

本稿では聴覚的印象のみを扱い、この資料の音響的分析の結果は、熊野・長岡・今田(1998)に譲る。両者の結果のつき合わせについては本稿では簡単に触れるにとどめる。

2. 調査の概要

東京語話者の録音調査は次の要領によって行った。

調査時期 1997年11月

調査場所 国際基督教大学日本語教育プログラム研究室

調査対象 本学の学生で共通語話者20名。男性2人を1組として5組計10名、女性も同様5組計10名。

東京語話者と認定した基準は、本人が東京都および隣接各県で言語形成期を過ごした者であることとした。首都圏のうち東京都に隣接する埼玉県、千葉県、神奈川県の出身者で若い年齢層の者は、共通語の話し手であるとの判断による。

録音内容 『しんにほんごのきそ』Iの会話文(全25課分)の朗読

録音方法 男性同士あるいは女性同士2名の対話形式とした。会話文は、2人のうち1人がAさん、もう1人がBさんの役になって、なるべく自然な調子で読み上げてくれるように指示した。25課まで終わったところでAとBの役割を交替し、もう1度読んでもらった。調査者の1人が立ち会った。

3. 分析の方法

本稿で扱う文は、この教科書の「か文」64文のうち、あいづちの「そうですか」を除いた57文である。

会話文の録音テープを調査者3名が聞き取り、聴覚的印象を記録した。初めに話者数名分のテープを3名で一緒に聞き、次に各自で全部のテープを聞いた。その後で3名の聞き取り結果をつき合わせて比較し、最後に総合的に判定した。

「上昇」か「非昇」かの判断の基準は次の通りである。まず基本的理解としては、「～ですか」「～ますか」「～ましたか」「～ませんか」などの「カ」が、その直前の音よりもピツ

表1 非昇と判定した発話数（文別）

	本 文	機 能	3人非昇	1、2人非昇	合計
1	これはあなたの手紙ですか。	質問（判）	2	2	4
2	このボールペンもあなたのですか。	質問（判）	1	5	6
3	かばん売り場はどこですか。	質問（補）	1	4	5
4	かばん売り場ですか。	確認	4	3	7
5	このかばんはいくらですか。	質問（補）	2	2	4
6	日本語の勉強は何時からですか。	質問（補）	1	2	3
7	何時までですか。	質問（補）	2	4	6
8	きょうの午後は何ですか。	質問（補）	0	2	2
9	何時に終わりますか。	質問（補）	3	2	5
10	横浜までいくらですか。	質問（補）	1	2	3
11	あ、木村さん、どこへ行きますか。	質問（補）	2	1	3
12	この電車は横浜へ行きますか。	質問（判）	2	1	3
13	もしもし、佐藤さんですか。	質問（判）	0	3	3
14	あした、暇ですか。	質問（判）	1	1	2
15	じゃ、いっしょに横浜で映画をみませんか。	さそい	1	3	4
16	どこで会いますか。	質問（補）	1	2	3
17	わあ、何ですか。	質問（補）	1	1	2
18	これですか。	確認	3	2	5
19	お元気ですか。	質問（判）	2	2	4
20	コーヒーはいかがですか。	すすめ	1	2	3
21	日本語の勉強はどうですか。	質問（補）	1	3	4
22	はい、何ですか。	質問（補）	2	5	7
23	どうしましたか。	質問（補）	3	1	4
24	熱がありますか。	質問（判）	1	0	1
25	あのう、近くに郵便局がありますか。	質問（判）	1	2	3
26	わかりませんか。	確認	6	3	9
27	この手紙はインドまでいくらですか。	質問（補）	2	2	4
28	エアメールですか。	質問（判）	0	2	2
29	どのくらいかかりますか。	質問（補）	1	1	2
30	旅行はどうでしたか。	質問（補）	0	1	1
31	天気はどうでしたか。	質問（補）	2	1	3
32	どこがよかったですか。	質問（補）	1	2	3
33	横浜公園へ遊びに行きませんか。	さそい	0	4	4
34	あのレストランに入りませんか。	さそい	2	2	4
35	もう少し安いのはありませんか。	質問（判）	0	2	2
36	こちらはいかがですか。	すすめ	3	2	5
37	ラオさんは結婚していますか。	質問（判）	1	3	4
38	兄弟は何人ですか。	質問（補）	1	0	1
39	妹さんはおいくつですか。	質問（補）	4	1	5
40	勉強が終わってから、いっしょに食事しませんか。	さそい	3	0	3
41	ええ、どこへ行きますか。	質問（補）	1	0	1
42	ナロンさんは何が食べたいですか。	質問（補）	2	1	3
43	何にしますか。	質問（補）	1	2	3
44	田中さん、あのロボットの写真を取ってもいいですか。	許可求め	0	1	1
45	来週スキーに行きませんか。	さそい	1	0	1
46	食べたことがありますか。	質問（判）	0	1	1
47	もしもし、林さんですか。	質問（判）	1	1	2
48	見学について何か意見がありますか。	うながし	2	6	8
49	これからどんな工場を見学したいですか。	質問（補）	1	0	1
50	ほかの皆さんはどうですか。	うながし	3	1	4
51	鈴木さん、今晚いっしょに食事に行きませんか。	さそい	2	0	2
52	木村さんもいっしょにどうですか。	さそい	3	2	5
53	新宿までいくらですか。	質問（補）	2	0	2
54	このボタンは何に使いますか。	質問（補）	2	1	3
55	今までどのくらい日本語を勉強しましたか。	質問（補）	1	1	2
56	ほんとうですか。	おどろき	1	3	4
57	ひらがなやかたかなも習いましたか。	質問（判）	1	3	4
	合 計		99	106	205

チが高ければ「上昇」とし、低いあるいはほぼ同じ高さなら「非昇」とした。ただし、「カ」が低く始まり、途中から上昇して少し長く発音される場合も「上昇」と考えられる。上昇の中で更に細分する必要があるときは便宜上の分け方をした（4-2-2）。

「非昇」の場合も「カ」が少し伸びたり、低く平らに終わる場合も下降する場合もあるが、判定が困難なため「非昇」は1種類とした。調査者3名で聞き取りに不一致がみられたものについては特に入念にテープを聞き直し、それでも一致しないものはその原因を検討した。

4. 結果と考察

4-1 調査と分析の結果

『しんにほんごのきそ』Iの「か文」57例について、調査対象である男女各10名、計20名の発話（のべ1140発話）をデータとして収集した。この1140発話に対して調査者3名が上昇／非昇の判定をした結果、調査者3名が上昇と判定した発話、調査者3名、2名、1名が非昇と判定した発話、の四つのケースがあることがわかった。この結果を、「か文」各文ごとに表1に示す。

1140発話のうち、調査者3名が上昇と判定したものは、935発話（82%）、非昇と判定したものは99発話（8.6%）、判定が不一致だったもの（2名または1名が非昇と判定）は106発話（9.3%）であった。

表1の「機能」の欄に記した「すすめ、確認」などの機能は、仁田（1991）を参考に文脈から調査者が判断して分類した。「質問（判）」は「判定要求の質問」、「質問（補）」は「補充要求の質問」を表わす。なお、「3人非昇」は、調査者3名が非昇と判断した発話数を、「1,2人非昇」は2名が非昇と判断した発話数と1名のみが非昇と判断した発話数の合計を示す。57文の中で3名が一致してすべての話者に対して上昇調と判定したものは0件であった。

次に発話者別に、上昇非昇の判定の結果を表2に示す。Mは男性を、Fは女性を示す。また、表2の結果の一部を図1にグラフで示す。

表2 非昇と判定した文数（発話者別）

対象	M 1	M 2	M 3	M 4	M 5	M 6	M 7	M 8	M 9	M10
1人非昇	1 0	6	2	4	7	8	0	1 0	0	3
2人非昇	4	1 3	3	1	2	1	0	4	2	0
3人非昇	3 6	1 4	1 1	0	2	1	0	1 7	4	3
合計	5 0	3 3	1 6	5	1 1	1 0	0	3 1	6	6

対象	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7	F 8	F 9	F 10
1人非昇	0	1	1	0	0	2	6	1	1	2
2人非昇	1	0	0	0	1	0	5	3	1	0
3人非昇	0	1	0	1	1	1	3	0	2	2
合計	1	2	1	1	2	3	14	4	4	4

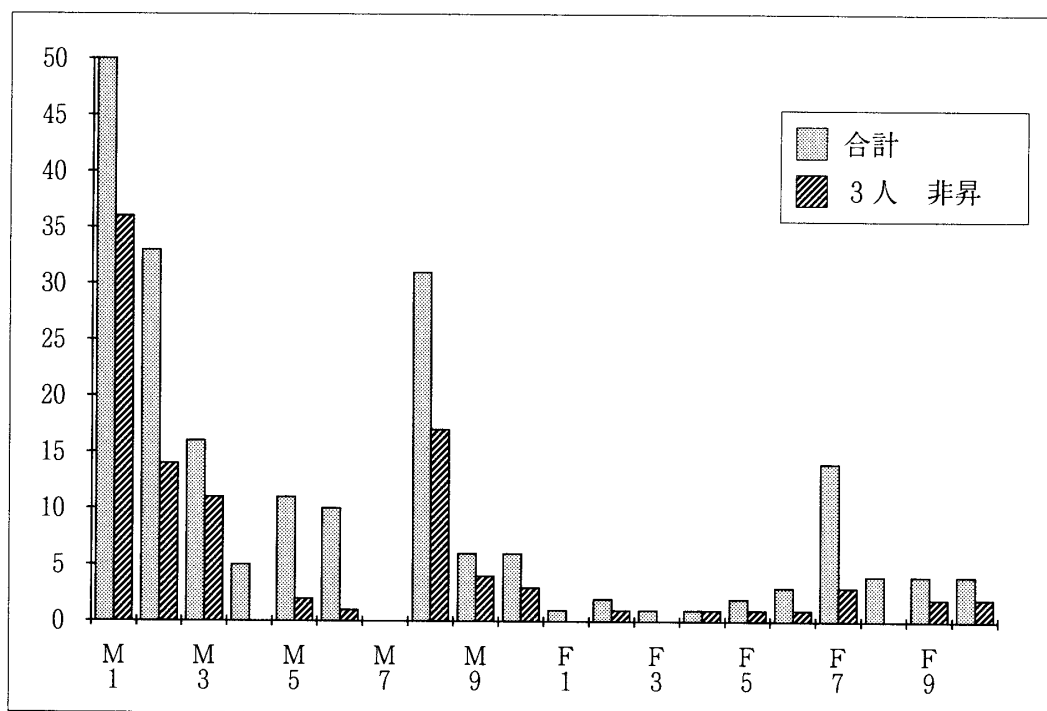


図1 非昇と判定した文の数（発話者別）

4-2 音声的特徴

録音テープの聞き取りから、「か文」の文末イントネーションに影響を与える音声面の要素を取り出してみる。これには、文の形態的特徴と個人差の二つがある。

4-2-1 文の形態的特徴から

「か文」の文末を上昇させて発音するかどうかに関与する要素として、疑問詞を含むかどうか、文頭に応答詞や呼びかけの語があるか、文末の形態はどんなものか、文の長さはどうかなどが考えられる。これらについて、録音テープの聞き取りの結果を見てみたい。それぞれの要素については、非昇率の高い文13文（20人中非昇が11人以上＝非昇率19%以上）と非昇率の低い13文（4人以下＝7%以下）を比較する形で記述し考察する。

(1) 疑問詞が含まれているかどうか

表3 疑問詞の有無

	疑問詞あり	なし
上位13文	7 (53.8%)	6 (46.2%)
下位13文	5 (38.5%)	8 (61.5%)
全体57文	29 (50.9%)	28 (49.1%)

割合から言うと、疑問詞のある文の方が非昇率が高い。英語などの疑問詞疑問文では文末が上昇しないことと現象としては似ている。日本語では疑問詞疑問文も上昇調イントネーションで発話されるのが常識とされているが、実際には非昇もかなり起こっている。これは、質問の重点を疑問詞に置いて発音し、文末は上昇する必要がないと意識しているためと思われる。後述する個人差では、疑問詞にプロミネンスを置く話者もある。

なお、Geluykens (1988および1989) によると、英語の真偽疑問文でも、上昇せずに発話する場合があるという。それには、レトリカルな要素、ピッチの幅、ポーズの有無などが関わっているとのことである。

(2) 文頭に応答詞や呼びかけがあるかどうか

表4 文頭の応答詞・呼びかけ

	応答詞・呼びかけあり	なし
上位13文	1 (7.7%)	12 (92.3%)
下位13文	3 (23.1%)	10 (76.9%)
全体57文	9 (15.8%)	48 (84.2%)

応答詞や呼びかけのところではポーズを置くのが普通で、そのあとは一気に1文を発話する話者が多い。ただし、このことと文末の上昇・非昇との関係は今は説明できない。話者によっては応答詞や呼びかけのある文でもポーズを置かないで発話することがある。これについては後述する。

(3) 文末の形態

上位と下位を比べると、実数ではあまり差がないが、割合を見ると、「ですか」は上位の方が大きく、「ますか」は下位の方が大きい。つまり、傾向としては「ますか」よりも「ですか」の方が非昇率が高いと言える。

表5 文末の形態

	ですか	でしたか	ますか	ましたか	ませんか
上位13文	9 (69.2%)		2 (15.4%)	1 (7.7%)	1 (7.7%)
下位13文	7 (53.8%)	1 (7.7%)	4 (30.8%)		1 (7.7%)
全体57文	31 (54.4%)	2 (3.5%)	13 (22.8%)	3 (5.3%)	8 (14.0%)

その理由は、一つにはアクセントと関係があると考えられる。「ですか」は、その直前の語句のアクセント型によって、

a ~デ[↑]スカ b ~[↑]デスカ c ~デスカ (低平)

の3種の言い方がある。資料の中では、aは平板式の「これ、本当、おいくつ」(上位)、「暇、林さん」(下位)、cは起伏式の「何、どう、いかが、何時まで、鞆売場」(上位)、「何、どう、いい、したい、何人、エアメール」(下位)である。b(「デ」の直前にアクセント核のある語句、例えば「山」)は資料中になかった。一方、「ますか」の方は、その直前の語のアクセントに関係なく、~マ[↑]スカとなる。「ですか」も「ますか」も、「ス」は無声子音に挟まれた狭母音のため無声化する。その弱い音の前が常に高く発音される「ますか」は、「ス」の下降が顕著なため文末の上昇が現れやすく、「ですか」の方は「デ」から「ス」へ常に下降するわけではないため、文末を上昇させにくいということが言えるのではないか。上記の語を見ると、上位の平板式の3語のうち、「これ」「本当」は機能面では問い返しと驚きであるので別に考えた方がよい。

また、「ですか」と「ますか」を比べると、「デ」の母音[e]よりも「マ」の母音[a]の方が広いため、「ス」への下降が目立つ。

蔡(1996)では、「これ面白くない?」におけるアクセント核破壊について、「全核破壊型音調」と「後半核破壊型音調」について論じている。筆者も、最近の若者のくだけた会話に、特に「後半核破壊型音調」が目立つことに気がついた。ただし今回得た資料では会話文朗読のためか核破壊は起こっておらず、その代わりに文末の上昇が少なくなるという現象として現れている。

(4) 文の長さ(語数・句の数・拍数など…ポーズ、プロミネンスの置き方に関係する)

文の長さを測る単位としては、拍・語・文節などがあるが、ここでは文節を単位として数えた。その結果、上位13文の平均は2文節、下位13文の平均は2.9文節、全体57文の平均は2.7文節であった。これを見ると、文が短い場合は文末の非昇率が高いことがわかる。また次項に見るように、5文節ぐらいの長い文でも話者は1文を一気に発話する傾向がある(テキストは分かち書きであるにもかかわらず)。ひと息に発話することによって、上

に引用した蔡の言う「1文節化」が起こったものであろう。その結果は、蔡の指摘した核破壊が、本資料に見られる非昇という現象となって現れたと考えられる。

以上の特徴は、なお多くの資料によって検証しなければならないが、ある程度は、現代日本語の一般的特徴の一つと言ってよいであろう。

4-2-2 話者の個人差から

録音テープの聞き取り調査から、話し方の個人的特徴のうち、「か文」の文末イントネーションに関与するのは、発話のスピード、相手の反応への期待の程度、文中のポーズの置き方、文中のプロミネンスの置き方、ピッチの高低の幅などであることがわかった。表6は、それらについて話者の個人別の特徴を示したものである。男女20名の話者を、非昇率の高い順に並べてある。非昇率の欄の数字は、57文中の非昇文の数（表2による）をパーセントで示したものである。これらは音響分析を通さずに聴覚印象だけで判断したため、それぞれの中の分け方は粗くなっている。またそれぞれは、57文の中で個人個人が平均的に示した特徴を記してある。

表6 個人別の音声的特徴

	非昇率	スピード	期待	ポーズ	プロミネンス	高低差	上昇型
M 1	87.7%	速	普	無	ア核	大	カ
M 2	57.9	速	普	無	ア核	普	カー、カア
M 8	54.4	普	普	有	少	普	カ、カー
M 3	28.1	緩	大	多	ア核	普	カ、カー
F 7	24.6	普	普	有	ア核	普	カー、カア
M 5	19.3	やや速	普	有	少	やや小	カ、カー
M 6	17.5	普	普	有	少	普	カ、カア
M 9	10.5	やや速	大	やや多	ア核	普	カア
M10	10.5	緩	普	有	語	普	カー
M 4	8.8	緩	大	有	語	普	カ、カー
F 8	7.0	普	普	有	ア核	普	カ、カー
F 9	7.0	普	普	有	ア核	やや大	カ
F10	7.0	普	普	有	ア核	やや大	カ、カア
F 6	5.3	普	普	有	語	普	カ、カー
F 2	4.9	やや緩	普	多	少	やや小	カ

F 5	4.9	緩	普	無	少	普	カ
F 1	1.8	緩	やや大	多	少	普	カ
F 3	1.8	やや緩	普	有	ア核	普	カ、カー
F 4	1.8	普	大	有	語	普	カー
M 7	0	普	普	有	語	普	カ

期待 発声など読み方全体が相手に話しかける調子であって、相手に問いかける気持ちが出ていると思われるものが「大」

ポーズ 有：応答詞・呼びかけの語のあとにポーズを置く
無：それらの語のあとにもポーズを置かない
多：それら以外のところにもポーズを置く

上昇型 カ：直前の拍よりもカが高く、上昇する
カー：直前の拍よりもカが高く、少し長く、上昇する
カア：直前の拍とカが低く、その後で上昇する

上の表に見るように、非昇率は男性の方が高い。非昇率の平均を出してみると、男性は29.5%、女性は6.3%である（男女の平均は17.8%）。その原因は、ここで扱っている音声的特徴からは確定的なことは言えない。強いて言えば、男性の方が話し方が速いことぐらいであろう。文末を上昇調で発話することは、男性にとって心理的に抵抗があるのであろうか。

今回の調査では、「期待」の欄を見ると、男性でも問いかけの気持ちを表して読んだ話者がいる。そのことから考えると、発声などで問いかけの気持ちを表すことと文末を上昇させることとは別のようなものである。

次に男女合わせて20名の学生について、音声的特徴を見てみたい。表6を見る限りでは、スピード以下6項目のうちで特に文末イントネーションに関与していると思われるものは、スピード、ポーズの置き方、プロミネンスの置き方である。非昇率最上位の2名は、他の人に比べて話し方が速い。速く話すために全体がひとつづきとなり、あいづちの「そうですか」と同じように文末が非昇になるのであろう。下位の方にはそれほど速く話す人はいない。もっとも例外はあり、上位にもゆっくり話す人もいる（M3）。

ポーズは、やはり非昇率上位の2名は応答詞や呼びかけのところでも置かず、ひと息に発話している。この2名のように、速く、ポーズなしで発話する場合は文末を上昇させるににくいことがわかる。例外もある（M3はポーズが多いが非昇率は高い方であり、F5はポーズを置かないが非昇率は下位）、全体的な傾向としては、ポーズを置かないことと非昇率は関係があると言える。スピードとポーズの両方で例外となったM3は、相手への期待も

大きな話し方をしており、さらに次に扱うプロミネンスも少ないという、文末を上昇させる条件を備えているのであるが、非昇が多い。それがなぜかは問題として残る。

プロミネンスの置き方は、はっきりした特徴とは言えないが、ある傾向としては、アクセント核にプロミネンスを置くと非昇率も高くなり、疑問詞などの語にプロミネンスを置くと文末の上昇が現れると言える。

ピッチの高低差も文末の上昇・非昇に影響があると思われるが、この資料では、第1位の話者以外は説明できない。音響分析をまち、またサンプル数を多く取って分析する必要がある。

文末の上昇型は、男性・女性とも個人差がある。しかしこの上昇型と非昇率の関係はこの資料だけでは言えない。それは、各文を読むその瞬間に、その話者がどんな意図を盛り込んでいるかによって微妙に変わってくると思われるからである。個人的な傾向として、「カ」を短く上昇させる人（M1、F9、F5、F2、F1、M7）と、少し長くして上昇させる人、「カ」を低く、伸ばした部分を上昇させる人（M2、F8、M6、M9、F10）がある。本稿の文の機能に加えて個々の場合の発話意図の記録が必要である。

4-3 コミュニケーション機能

「か文」文末イントネーションの上昇、非昇は、「その文が談話の中で果たしているコミュニケーション機能と密接に関連しているのではないか」との仮説にもとづいて調査結果を分析、考察してみた。

4-3-1 「か文」のコミュニケーション機能

文末が「か」で終わる文がすべて疑問文、質問文ではないことは周知のとおりである。本調査でも、あいづちの「そうですか」は、はじめから調査対象項目からはずしてある。しかし、調査対象とした全57の「か文」も、形式上、またコミュニケーション機能上、一様ではない。これらの文は、形式的にはいわゆる「真偽疑問文」(Polar-Question)と「疑問詞疑問文」(Wh-Question)に分けることができる。また、コミュニケーション機能としては、「判定要求、補充要求などの質問」「確認」「さそい」「すすめ」「許可求め」「おどろき」「働きかけ・うながし」などを考えることができるだろう。このような観点から、57文を表1のように分類した。そして、文末イントネーションが上昇と判定された文と非昇と判定された文を比較し、そこに何らかのコミュニケーション機能上の差異が認められるかどうかを考察した。

4-3-2 文末イントネーションが非昇の文とコミュニケーション機能

表7は、調査者3名ともに「非昇」と判定した話者が多かった文の一覧表である。

(表の読み方は、「56 ほんとうですか」の文は20人の話者のうち11人の話者の発話について、調査者3名ともに「非昇」と判定し、「26 わかりませんか」の文では、20人の話者のうち6人の発話について調査者3名ともに「非昇」と判定したという意味である。)

表7 3名とも「非昇」と判定した話者が多かった(3人以上)文: 11文

	形式	機能	人数
56 ほんとうですか。	P-Q	おどろき	11人
26 わかりませんか。	P-Q	確認	6人
4 かばん売り場ですか。	P-Q	確認	4人
39 妹さんはおいくつですか。	Wh-Q	質問	4人
9 何時に終わりますか。	Wh-Q	質問	3人
18 これですか。	P-Q	確認	3人
36 こちらはいかがですか。	Wh-Q	すすめ	3人
52 木村さんもいっしょにどうですか。	Wh-Q	さそい	3人
23 どうしましたか。	Wh-Q	応答	3人
50 ほかの皆さんはどうですか。	Wh-Q	質問	3人
40 勉強が終わってから、いっしょに食事しませんか。	P-Q	さそい	3人

表8は、3名の調査者の少なくとも1人が「非昇」と判定した話者が多かった文である。

表8 少なくとも1人が「非昇」と判定した話者が多かった(5人以上)文: 13文

	形式	機能	人数
56 ほんとうですか。	P-Q	おどろき	14人
26 わかりませんか。	P-Q	確認	9人
4 かばん売り場ですか。	P-Q	確認	7人
22 はい、何ですか。	Wh-Q	応答	7人
48 見学について、何か意見がありますか。	Wh-Q	質問(うながし)	7人
2 このボールペンもあなたのですか。	P-Q	質問	7人
3 かばん売り場はどこですか。	Wh-Q	質問	6人
39 妹さんはおいくつですか。	Wh-Q	質問	5人
9 何時に終わりますか。	Wh-Q	質問	5人

18	これですか。	P-Q	確認	5人
36	こちらはいかがですか。	Wh-Q	すすめ	5人
52	木村さんもいっしょにどうですか。	Wh-Q	さそい	5人
7	何時までですか。	Wh-Q	質問	5人

表7と表8から次のような傾向が見出される。それは、「非昇」と判定された話者が多かった文は、コミュニケーション機能という観点から見ると、典型的な質問文とは言えないものが多いということである。形式的には「真偽疑問文」「疑問詞疑問文」の形をとってはいるものの、表7、表8に挙げられた「か文」は以下の特色を持っている文なのである。

- ① あいづち（「ふうん」と同じようなもの）…… 56 ほんとうですか。

この文を「不信」の表現と解釈した話者（6名）は上昇調で発話し、「おどろき」や「あいづち」と解釈した話者（11名）は非昇調で発話したのだと思われる。残りの3名については、調査者間で判定に不一致があった話者である。

- ② 応答（相手の言葉を聞き取ったことを示すサイン、「はい」「ええ」などと同じ）
 …… 22 はい、何ですか。
 23 どうしましたか。

- ③ 確認（「これですね、私の理解したことは正しいですね）……
 4 かばん売り場ですか。
 18 これですか。

「26わかりませんか。」は確認とともに「そうか、わからないのか」と困惑するような気持ちの表明も含む。

- ④ すすめ（助言を与えるようなもの）…… 36 こちらはいかがですか。

- ⑤ さそい …… 52 木村さんもいっしょにどうですか。
 40 勉強が終わってから、いっしょに食事しませんか。

- ⑥ 相手の言葉を引き出すための働きかけ・うながし……
 50 ほかの皆さんはどうですか。

48 見学について何か意見がありますか。

⑦ 上記①～⑥では説明できないもの……

39 妹さんはおいくつですか。

9 何時に終わりますか。

2 このボールペンもあなたのですか。

7 何時までですか。

これらの文に関しては、ディスコースの構造が関与していると思われる。すなわち、一連のディスコースの中で、質問-答え、質問-答えが続くとき、話者は何らかの配慮のもとに音声上の変化をつける必要を感じ、そのために純粋な質問文であっても、時に非昇調のイントネーションを用いるのであろう。

⑧ コミュニケーション機能という観点からも、ディスコースという観点からも説明できないものとして「3 かばん売り場はどこですか。」が残る。この文は話者にとって未知の事柄についての情報を求める質問文であり、しかも、談話のはじめの部分に質問文としては初出という位置で発話されている。にもかかわらず調査者3名とも「非昇」と判定した話者が1人、3名のうちのだれかが「非昇」と判定した話者が4人、計5人の話者がこの文を非昇調のイントネーションで発話している。この現象はどのように解釈したらよいのだろうか。今後、さらに資料を増やして分析・考察する必要がある。

以上で、「非昇調イントネーション」で発話されることの多い「か文」のコミュニケーション機能という観点からの考察を終わる。

4-3-3 文末イントネーションが上昇の文とコミュニケーション機能

つぎに文末イントネーションが上昇と判定された文はどのようなコミュニケーション機能上の特徴を持っているかを考える。表9は、20人の話者のうち19人、ないし18人の話者が上昇調のイントネーションで発話した文の一覧表である。

表9 「上昇調」で発話した話者が多かった文：18文

	形式	機能	人数
30 旅行はどうでしたか。	Wh-Q	質問	19人
44 田中さん、あのロボットの写真を取ってもいいですか。	P-Q	許可求め	19人
46 食べたことがありますか。	P-Q	質問	19人

24 熱がありますか。	P-Q	質問	19人
38 兄弟は何人ですか。	Wh-Q	質問	19人
41 ええ、どこへ行きますか。	Wh-Q	質問	19人
47 もしもし、林さんですか。	P-Q	確認(電話)	19人
49 これからどんな工場を見学したいですか。	Wh-Q	質問	19人
8 今日の午後は何ですか。	Wh-Q	質問	18人
14 あした暇ですか。	P-Q	質問	18人
17 わあ、何ですか。	Wh-Q	質問	18人
28 エアメールですか。	P-Q	質問	18人
29 どのくらいかかりますか。	Wh-Q	質問	18人
35 もう少し安いのはありませんか。	P-Q	質問	18人
51 鈴木さん、今晚いっしょに食事に行きませんか。	P-Q	さそい	18人
53 新宿までいくらですか。	Wh-Q	質問	18人
55 今までどのくらい日本語を勉強しましたか。	Wh-Q	質問	18人

表9を見ると、多少の例外はあるものの、上昇調のイントネーションで発話する話者が多い文は、話し手が聞き手の持っている情報を求めていたり、聞き手の判断を要求したりしている典型的な質問文がほとんどであることが分かる。「か」を伴わない文の場合、文末イントネーションを上昇調に発話することによって質問文を作ることができることから見ても、話し手にとって未知のことを聞き手から聞き出すという機能を担った質問文は、通常「上昇調」で発話されると言えるのではないか。一方、「か文」であっても、単なる「あいづち、応答」であったり、「確認」、「さそい」など「質問」以外のコミュニケーション機能を担っている文は、「非昇調」のイントネーションで発話されることが多いと言えよう。

4-4 ディスコースから見たイントネーションの特徴

「か」文が使われている会話を「ディスコース」と呼ぶことにし、内容の面から分類してイントネーションとの関係を考察する。

『しんにほんごのきそ』Iの会話文で、「か」文がある会話をまとめりごとに内容(あるいは場面)から分類すると、次のようなタイプが抽出できた。

- (1) 単純な質問と応答(例: 1これはあなたの手紙ですか。他2、5、17、23、24、28、29、42、43、54)
- (2) 自分の行動に必要な情報を得る(例: 3かばん売場はどこですか。他10、12、25、27、

- 44、53)
- (3) 社交的な会話 (例: 6日本語の勉強は何時からですか。他7、8、9、11、19、21、30、31、32、37、39、46、55、56、57)
- (4) さそいと、行動を共にするための調整 (例: 14あした、暇ですか。他15、16、20、33、34、40、41、45、51、52)
- (5) 交渉 (例: 35もう少し安いのはありませんか。他36)
- (6) 意見交換 (例: 48見学について、何か意見がありますか。他49、50)

「13もしもし、佐藤さんですか」のような電話での定型的な表現、「4かばん売場ですか」のような確認および例文の少ない(5)交渉、(6)意見交換を除いて、各タイプごとの非昇の特徴を調べた。その結果、表10のように、社交的な会話でやや非昇の傾向が高いこと、また、自分の行動の達成のために場所や値段を尋ねる文(2)行動達成)では判定が不一致になっている例が、やや多いことがわかった。

表10 ディスコースのタイプ別に見た文末イントネーションの判定結果

ディスコースのタイプ	上昇(のべ)	3名が非昇	1、2名が非昇	非昇の文の計
(1) 単純な応答 (11文)	186文	16文	18文	34文 (15%)
(2) 行動達成 (7文)	119	9	12	21 (15%)
(3) 社交的会話 (17文)	275	33	32	65 (19%)
(4) 行動調整 (11文)	188	16	16	32 (15%)

社交的な会話で、非昇の率が高くなる原因は次のように考えられる。『しんにほんごのきそ』Iの社交的な会話文は表11のように、次々に問いをたたみかけるような構成になっている。このように問いをたたみかけるように発するのは不自然なことで、現実の談話のなかでは間にあいづちや問いかえしや、自分の情報を加えるなど会話をはずませるさまざまな発話が行われているはずである。この会話のようにそれらの円滑剤をはさまずに、しかも全て上昇調で発話すると詰問調に聞こえる。そこで、この詰問調を避ける心理から明確な上昇調が現れなかったのではないだろうか。実際、「56ほんとうですか。」は質問ではなくあいづちの機能をもち、今回の調査のなかでも最も非昇の率の高い文であった。

表11 『しんにほんごのきそ』Iの社交的な会話の文

レ ッ ス ン 4	6 日本語の勉強は何時からですか。 7 何時までですか。 8 きょうの午後は何ですか。 9 何時に終わりますか。
レ ッ ス ン 12	30 旅行はどうでしたか。 31 天気はどうでしたか。 32 どこがよかったですか。
レ ッ ス ン 15	37 ラオさんは結婚していますか。 38 兄弟は何人ですか。 39 妹さんはおいくつですか。
レ ッ ス ン 24	55 今までどのくらい日本語を勉強しましたか。 56 ほんとうですか。 57 ひらがなやかたかなも習いましたか。

5. 聞き取りの不一致

5-1 「聞き取りの不一致」とは

前述したように、3名の東京語話者が疑問の助詞「か」のつく文の発話について、上昇、非昇の判定をした。その結果3名の判定が一致するものと一致しないものがあることがわかった。ここではこの3名の判定が一致しないケースを「聞き取りの不一致」と呼ぶことにする。

「聞き取り不一致」の文は『しんにほんごのきそ』Iの「か」のつく57文、20名分で合わせて1140例のうち、106例(9.3%)である。

そこで、次に「聞き取りの不一致」の現象とはどのようなものなのか、その音声的な特徴を述べる。そして、この現象がおこる原因として機能的な側面とディスコース的側面について考察したい。

5-2 「聞き取りの不一致」の音声的特徴

音声的特徴に関する聞き取りの不一致の要因として、形態的には、「カ」の直前の音が無声化するものと鼻音のものがあること、また個人差では、発話のスピードとポーズとプロミネンスがからみ合っていることの二つが挙げられる。

まず形態面について。「～ですか」「～ますか」においては、「カ」の直前の「ス」が無声化するため、「カ」は多少強く発音される傾向がある。このため、それを「上昇」ととるか、心理的には上昇しているとは言えないとして「非昇」ととるかで聞き取りに不一致

がおこる。

「～ませんか」においては、「カ」の直前の「ン」という軟口蓋鼻音は、「セン」という1音節の一部となって拍としての独立性が弱い。そこで次の「カ」が多少強く発音される。このとき、その強さを「上昇」ととるか「非昇」ととるかに別れる。

なお「～でしたか」「～ましたか」は聞き取りの不一致が少ない。これは、「カ」の直前の「タ」は母音がはっきりしているからだと思われる。

次に個人差として聞き取りの不一致に関与する要素について。不一致が起こる話者の発話は、スピードが速く、応答詞や呼びかけの語があってもポーズを置かず、文中のどこか1カ所（アクセント核を強調する）にプロミネンスを置いている人の場合に顕著である。「4-2-2 話者の個人差から」の「表6 個人別音声的特徴」に、非昇率は上位でありながら、スピードが緩やかで、相手への期待の程度が大きく現われ、ポーズも多く置いていたM3という話者があったが、この話者の不一致率はそれほど大きくない。つまり、文の長さにかかわらず、「1文節化」が起こっている場合は聞き取りに不一致が起こるといことになる。

5-3 「聞き取りの不一致」が起こる文のコミュニケーション機能上の特徴

表12は「聞き取りの不一致」が多かった順に57文を並べ替えたものである。この表を見ると、「聞き取りの不一致」が多かったもの上位6文のうち「33横浜公園へ遊びに行きませんか」以外の5文は、全て表7、表8の「非昇と判断された話者が多かった文」の中にあることが分かる。それは、比較的多くの話者が非昇調で発話する傾向のある文は、大多数の話者が上昇調で発話する文よりも「聞き取りの不一致」が起こりやすいと示している。そして、非昇調で発話されやすい「か文」とは、前述（「4-3-2 文末イントネーションが非昇の文とコミュニケーション機能」）のように、コミュニケーション機能という点から見ると典型的な質問文とは言えないような文だった。「聞き取りの不一致」が3発話で見られた「4 かばん売り場ですか」以下の8文の中には表7、表8にはあらわれていない文が5文（13、15、21、37、57）ある。しかし、これらの文も個別に検討してみると「13もしもし、佐藤さんですか」は「電話のあいさつことば」といったものであり、「15じゃ、いっしょに横浜で映画を見ませんか」は「さそい」、「21日本語の勉強はどうですか」は「話題の提供、話のきりだし」というようなコミュニケーション機能を担った文なのである。一見質問文のように見えても、実は談話の中での文のコミュニケーション機能としては聞き手の判断や情報を求めるための質問をしているわけではない文だと言える。

ただし、以上のことから、「文のコミュニケーション機能が典型的な質問ではなく、あいさつ、確認、うながし、さそい、話題のきりだしなどのときに聞き取りの不一致が起こ

りやすい」と結論づけることはできない。むしろ、文のコミュニケーション機能が典型的な質問でないとき、その文は非昇調で発話される傾向があり、その発話の音声的な特徴の中に「聞き取りの不一致」を引き起こしやすい要因（話者の心理的なためらいなどが原因で発話がはっきりとした上昇調や十分な下降調にならないため、聴覚印象としては上昇とも非昇とも判断のつきにくい発話になるなど）があると言えるのではないだろうか。

表12 聞き取りの不一致が多い文

本 文	機 能	1、2人が非昇と判断した発話者
48 見学について何か意見がありますか。	うながし	6人
2 このボールペンもあなたのですか。	質問（判）	5
22 はい、何ですか。	質問（補）	5
3 かばん売り場はどこですか。	質問（補）	4
7 何時までですか。	質問（補）	4
33 横浜公園へ遊びに行きませんか。	さそい	4
4 かばん売り場ですか。	確認	3
13 もしもし、佐藤さんですか。	質問（判）	3
15 じゃ、いっしょに横浜で映画を見ませんか。	さそい	3
21 日本語の勉強はどうですか。	質問（補）	3
26 わかりませんか。	確認	3
37 ラオさんは結婚していますか。	質問（判）	3
56 ほんとうですか。	おどろき	3
57 ひらがなやかたかなも習いましたか。	質問（判）	3

5-4 「聞き取りの不一致」とディスコース

「聞き取りの不一致」がおこる原因としてディスコースに影響されているのではないかと考えられるものがある。「4-4 ディスコースから見たイントネーションの特徴」では、社交的会話に非昇の傾向が強いことを述べ、その原因として、次から次とたたみかけるように尋ねると詰問調になって不自然になるのではないかと考察した。「聞き取りの不一致」がおこる原因も、同様に「次々にたたみかけるように尋ねる詰問調を避ける」という心理が推測できる。たとえば、「これはあなたの手紙ですか。このボールペンもあなたのですか」「日本語の勉強は何時からですか。何時までですか。きょうの午後は何ですか（何の授業ですか、の意味）。何時に終わりますか」「旅行はどうでしたか。天気はどうでしたか。どこが良かったですか」などである。これらの質問文は、単純な質問であれ、社

交的な会話であれ、このすべてを上昇調で話すと、現実の会話としては何か詰問しているような印象をうける。そこでこの詰問調をさげようという心理から上昇をさけたイントネーションが生まれた可能性がある。

つまり、規範的には「か文」であるために上昇調を指向するが、「詰問調を避けたい」心理から非昇の傾向が現われ、結果としてあいまいなイントネーションで発話されたのではないだろうか。そのため、聴取者の耳にどちらとも言えないイントネーションとして聞こえ、その結果「聞き取りの不一致」がおこったと考えられる。

もう一つ、質問の内容から考えて、上昇調による詰問調を避ける心理が推測できるものがある。「3かばん売り場はどこですか」と「37ラオさんは結婚していますか」である。丁寧な発話であれば「かばん売り場はどこでしょうか」（非昇）のような言い方が普通であるし、いきなり相手が結婚しているかどうかを問うのはぶしつけな印象がある。そこで話者に上昇調で発話しきれない要因が発生し、上昇とも非昇ともとれる調子が生まれたと考えられる。

6. おわりに

本稿は、聴覚的印象からみた「か文」のイントネーションを扱ったもので、その範囲内では、次の諸点が明らかになった。

(1) 「か文」の文末の上昇・非昇の傾向

- ① 「か文」の文末が上昇調で発話されない場合が多くある。そこには男女差、個人差が見られる。非昇の起こる要因として、音声的特徴、コミュニケーション機能、デイスコースの三つが取り出せる。
- ② 男女差では、男性の方が非昇の起こる割合が大きい。
- ③ 個人差では、取り上げた57文中、最高が50文、最低が0文と大きな幅がある。
- ④ 音声的特徴では、全体を速くひと息に発話する場合、ポーズを置かない場合に非昇が多く現れ、相手への期待をもって話す場合に上昇調が多く現れる。
- ⑤ コミュニケーション機能では、あいづち、応答、確認、すすめ、さそいなど、疑問文の形はとっていても、典型的な質問文ではないものに非昇が多い。
- ⑥ デイスコースの面では、社交的な会話で非昇の傾向が高い。この原因は、次々とたみかけて問いを発すると詰問調になるために、会話を和らげる心理が働いたものと考えられる。

(2) 聴覚的印象の不一致

- ① 調査者3名が同じテープを聞いたときに、3名の間で不一致が起こった。57文、のべ1140文（57文×20人）文中、3名が一致したものは、上昇と聞いたものが935文、非昇と聞いたものが99文で、他の106文は3名の聞き取りに違いがあった。

- ② 不一致の原因は、音声面では、「～ですか」「～ますか」の「カ」の前の「ス」が、無声化するため、最後の「カ」が強く聞こえ、これを上昇と取る聞き手がいることによる。
- ③ コミュニケーション機能から見た不一致の原因は、非昇調で発話される傾向の強い文は、明確な上昇調に発話されない、つまりあいまいな調子になりやすく、結果として、聞き取りの不一致が起こると考えられる。
- ④ ディスコースの面から見た不一致の原因は、質問の文が続いた場合の詰問調や内容的に直接的な質問が失礼になることを避ける心理が働くと、上昇のイントネーションがあいまいに発話され、そのため聞き取りの不一致が起こると考えられる。

ここで取り上げた教科書に付いている音声テープでは、これら57文はすべて上昇調で発話されている。また、他の日本語教科書、あるいは教室での教師の疑問文の文末は、多くの場合上昇調である。これは、規範意識によるものと思われるが、その中でも特に、相手に問いかける、あるいは誘う、確認するなどの際に明瞭に発話しようとする意図の表れであろう。しかし今回の調査で明らかになったように、現実には男女差や個人差があるにしても非昇がかなり起こっているのである。教育の中にどう取り上げるべきかが今後の課題である。

最後に、熊野・長岡・今田（1998）の音響的分析との関係について簡単に触れておきたい。57文中、聴覚的印象と音響的分析が一致したのは、男性の平均36.6文、女性48.4文であった（男女全員の平均は42.7文）。一致しなかったものについてその傾向を見ると、音響的分析で非昇のものを、聴覚的印象では上昇ととらえたものが多い。男性に非昇が多いことと、「カ」の前の音が無声化していることから、このような結果になったと思われる。日常我々は、聴覚的印象によって相手の発話意図を理解している。その発話が、どんな意図でなされたか、音響分析すれば非昇なのに聴覚では上昇ととらえるのはどんな時かについて、さらに追究することが必要である。この点については別の機会に論じたい。

謝辞：本研究で使用した資料の録音の際には、広島大学の熊野七絵さんと長岡順子さんの協力を得た。記して感謝申し上げたい。

付記：本研究は、平成8・9・10年度文部省科学研究費基盤研究（B）（2）「地域の日本語教育活性化のための談話音声の研究」（研究代表者：今田滋子）の助成を受けて行われた。

注

- 1 Alfonso(1974) の第1課の解説には、
- KA is given a slightly higher tone than the syllable preceding it.
This way of asking a question is more affectionate and polite than
the question with a low intonation, and is often used in speaking
to children. (中略) The tone of KA must not be dropped too low,
however, for then one is not asking a question but showing admiration.
- (p.13)
- のように記され、当時すでに話し言葉における非昇に注目したのもあったことがわかる。

参考文献

- 今田滋子 1997 「初級日本語教科書における談話展開の文末韻律型－『日本語（にほんご・にっぽんご）』の会話テープ分析を中心に－」『日本語教育論文集－小出詞子先生退職記念－』凡人社
- 今田滋子 1998 「日本語の疑問文末「か」のイントネーション再考～テレビ談話資料を中心に」『広島大学日本語教育学科紀要』第8号 pp. 23-31
- 大石初太郎 1965 「疑問表現の文末音調」『音声の研究』第11集 日本音声学会 pp. 77-90
- 熊野七絵・長岡順子・今田滋子 1999 「東京語の疑問文末詞「か」のイントネーション～『しんにはほんごのきそI』の会話文読み上げ資料の音響的分析を中心に～」『広島大学日本語教育学科紀要』第9号
- 国立国語研究所 1960 『話しことばの文型(1)－対話資料による研究－』秀英出版 347頁
- 国立国語研究所 1983『日本語教育指導参考書11 談話の研究と教育I』133頁
- 蔡雅芸 1996 「同意要求的疑問文のアクセント核破壊型音調－「これ、面白くない？」について－」『東北大学文学部日本語学科論集』第6号 pp. 35-46
- 仁田義雄 1991 「第4章 疑問表現の諸相」仁田著『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房 pp. 135-164
- 前川喜久雄 1997 「日本語疑問詞疑問文のイントネーション」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版 pp. 45-53
- Alfonso, Anthony. 1974. *Japanese Language Patterns, Volume 1*, Sophia University, pp.613.
- Geluykens, Ronald 1988. "On The Myth of Rising Intonation in Polar Questions", *Journal of Pragmatics 12*, pp. 467-485.
- Geluykens, Ronald, 1989. "R(a)ising Questions: Question Intonation Revisited -- A Reply to Batliner and Oppenrieder", *Journal of Pragmatics 13*, pp. 567-575